

小学校高学年児童の体育授業に対する好意度を決定する要因分析と 授業実践への適用

教科・領域教育専攻

生活・健康系（保健体育）コース

竹 岡 伸 一

指導教官 賀 川 昌 明

I 研究の目的

体育授業場面では、運動の技能の習得や発揮を中核とした学習が展開されることがしばしばであり、その運動パフォーマンスによって、その児童の学習活動全体が評価されやすい。そのために、運動技能の低い児童の場合は体育授業で劣等感を抱くことも多くなり、体育に対して否定的な態度を示す、いわゆる「体育嫌い」の児童が存在している。

そこで、本研究の調査研究では小学校高学年児童の体育が好きな理由、嫌いな理由を明らかにし、体育嫌いを解消していくための学習指導プログラムを検討することを目的とした。また、事例研究では調査研究の結果を基に学習指導プログラムを考案し、その有効性を検討することとした。

II 調査研究

方 法

1. 調査内容

調査1：体育好き・体育嫌いの抽出

体育の好き嫌いをストレートに問う代表質問形式で「とても好き」「好き」「きらい」「とてもきらい」の4反応方式を用いた。

調査2：体育好き・体育嫌いの理由について

佐久本らが作成した50項目からなる運動好き・嫌いに関する調査用紙の表現等に修正を加えるとともに必要な項目を加え、72項目の体育

好き・嫌いに関する質問紙を作成した。これらの項目に対して、「とてもよくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階評定尺度で回答してもらった。

2. 調査対象：徳島県他3県の小学校高学年児童2550名。

3. 調査方法：各学校とも学級担任による一斉調査。

4. データ処理：72項目に対する反応から主因子法により、固有値1.0以上の因子を抽出し、バリマックス回転後、因子負荷量の絶対値0.4以上を基準とし、因子を解釈した。そして、上位4項目を選び下位尺度を構成した。その結果、

6下位尺度24項目が採択された。各下位尺度名は「運動効力感」「教師の受容的人間性」「教師の指導に対する不満」「体育授業での身体的苦痛」「仲間からの疎外体験」「仲間からの受容体験」である。これら6下位尺度において、体育の好き嫌いによってどのような傾向がみられるのかを調べるため、体育を「とても好き」「好き」と答えた児童を好き群、「きらい」「とてもきらい」と答えた児童を嫌い群として、体育の好き嫌い(2)の1要因分散分析を行った。また、児童の体育好き群、体育嫌い群を決定するのに上記の6下位尺度がどのくらい影響を与えているのかを明らかにするためステップワイズ法による判別分析を行った。

結 果

1. 分散分析結果

分散分析の結果、すべての下位尺度において、体育の好き嫌いに有意な主効果 ($p < .001$) が認められた。「運動効力感」「仲間からの受容体験」「教師の受容的人間性」では好き群の平均得点が高くなる傾向がみられた。「体育授業での身体的苦痛」「教師の指導に対する不満」「仲間からの疎外体験」では、嫌い群の平均得点の方が高くなる傾向がみられた。

2. 判別分析結果

判別分析を行ったところ、学年・性別に共通して、「運動効力感」「仲間からの受容体験」「体育授業での身体的苦痛」「仲間からの疎外体験」が有意な変数として採択された。その中で学年・性別を通じて最も高い係数を示したのが「運動効力感尺度」であった (5 年男子 0.7997, 5 年女子 0.7823, 6 年男子 0.7945, 6 年女子 0.8016)。すなわち、学年・性別に共通して、「運動ができるか、できないか」が、体育好き群・嫌い群の区別に影響を与えていることを示している。なお上記下位尺度に基づくこの判別関数による体育好き群・嫌い群の適正判別率は 88% であった。

III 事例研究

方 法

調査研究で明らかとなったデータを基にして、体育授業プログラムを立案し、徳島市の S 小学校 (5 年 2 組, 5 年 3 組のクラス担任及び児童) に協力してもらい、授業実践を行った。

1. 調査内容 : a 児童の基本的属性, b. 体育の好き嫌い及びその理由について, c. 運動有能感, d. 形成的授業評価, e. マット運動に対する意識の変化について, f. 教師の声かけに対する

児童の受けとめ方についての調査

2. 教師の言語行動分析, ターゲット・パーソン (以下, TP) の学習行動の録画 : 教師の教授行動, TP の学習行動をビデオカメラで追跡しながら撮影した。教授行動に関しては、授業分析用カテゴリーにより、教師の言語行動を分析した。TP に関しては、3 視点から逐次記述した。

結 果

調査項目、教師の言語行動分析, TP の学習行動記録などのデータを踏まえて、各クラスともに、全体傾向、態度変容児童, TP の分析を行った。その結果、体育嫌いからプラス変容した児童については「運動ができるようになること」「仲間からの受容体験」が影響を及ぼしており、調査研究での仮説を一応立証する結果となった。しかし、マイナス変容した児童は「運動ができるようになること」「仲間からの受容体験」が不十分であったことが挙げられた。また、変容しなかった児童についてはその原因を確定することは困難であった。

IV 結 論

体育授業を通して、体育嫌いを解消していくためには、運動ができるようになるだけではなく、教師や仲間との関わりあいを重視することが重要であると考えられる。それを行っていくためには、こういった授業の工夫だけではなく、教師が児童に対して肯定的な関わりを持っていくことが重要であると考えられる。